

# 北海道 常呂農協

〒093-02 北海道常呂郡常呂町字常呂  
☎0152-54-2121

常呂町農協の久世篤史組合長とは、確か3年前、「土を考える会道東支部集会」という会合で会ったのが最初だった。これは道東地区の専業農家が集まる会である。そんな場所に農協組合長が出席しているのだ。それだけでも印象が強かった。「農協は営農を大切にしろ」

農協組織がよく口にするスローガンである。そんなスローガンを掲げながら、本当に土のことを考えている農協組合長は果たして何人いるか。土をいじくったこともない。背広ばかりで作業服も着たことがない。そんな農協組合長もいる。それと比べてというのが、久世組合長と最初に出会った時の印象だった。

網走市のすぐ隣の常呂町は、オホーツクに流れ込む常呂川の流域に広がる農業の町である。この地に開拓の鍬が初めて入ったのは、明治16年（1883年）のことだった。久世組合長の住む岐阜地区

## 農家の情報拠点たりうる 農協にした組合長の人柄

良い農協は「こころ」が違う！  
エグゼレント農協探訪記

15



農業評論家  
土門 剛

どもん たけし/1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。「省益に走った農水官僚の100日」(中央公論94年3月)、「食管死守で焼け太る農水官僚」(This is 読売94年3月)、「懸案見送られた食管改革」(同94年7月)、「食管制度のあり方に関する調査懇談会」(エコノミスト94年8月)など、農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆。主な著書に、94年1月「農林中金の憂鬱」(日経フィナンシャル94)、93年10月「市場開放決断の日」(日本経済新聞)、92年11月「農協が倒産する日」(東洋経済新報社)、「穀物メジャー」(共著/家の光協会)、「東京をどうする、日本をどうする」(通産省八幡和男氏と共著/講談社)、「新食糧法で日本のお米はこう変わる」(東洋経済新報社)など。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。

でも、4年前、開基100年を祝った。地名の由来の通り、岐阜県大野町からの開拓移民が集団で移住してきた。開基100年祭では、町内に住むその末裔たちが「ルーツ」を確認のため、先祖がたどってきた道をトラクターで訪れたという。

「先祖は本当によく基礎を作ってくれたと感謝をしているよ。常呂平野は平坦でね。ちよつと雨が降れば川の氾濫が起きるんだ。入植当初は、木を切り開いてやつとこさで種を植えて収穫しようとしたら、水に浸かってしまう。こんな苦い歴史の繰り返しのようなと聞くよ。大正8年(1919年)に堤防をつけてもらうよう陳情して、それができたのが昭和3年のことだった。完成に8年ほどかかったな」

本当に実直そうな人である。何のほつたりもない。農協を訪れて最初の話題も「土」のことだった。土のことになれば話にも熱が入ってくる。根っからの農の人である。「土」にこだわるのはもう一つ理由があるのだ。災害である。常呂町の農家は、災害とずっと向き合ってきた。

### ▽災害から学ぶこと

「92年からずっと災害続きなんですよ。土壌が粘土質なもんでね。雨が降るとダメですよ。この辺はね」

常呂川に沿った平野部分は、上流の沖積土で半分は泥炭地だという。その沖積土は肥沃である。作物はなんでも作れた。そんな農業を100年間も続けてきた。弊害も確実に出てくる。土中の微量元素がだんだんとなくなっていくことだ。略奪農業ともいう。地力がなくなる。水はけも悪くなる。従って雨が降ると地獄へという凶式だ。水がすぐに引かないので根腐れを起こす。久世組合長の説明である。逆に干ばつのは最高にとれる。本当に難しい土である。久世組合長が、土を考える会のメンバーであることは、これですぐに合点がいった。

頭の中には管内の土壌マップがインプットされているらしい。説明もスラスラだ。もうちよつと詳しく土壌を説明してもらおう。

「平野は沖積土と泥炭です。沖積土は上流から土が運ばれてきた。葦が生えていたところが泥炭地。海岸端は砂地。高台は重粘土質。土質はさまざまだね。砂地がもつとも生産性が高いんだな」

常呂町農業を振り返ってみれば、水と土との闘いの連続だった。先達も大いに苦しめられた。このハンデが常呂町の農家をたくましくしたようだ。家貧しくして孝子出ず。常呂町にはプロ農家がたくさんいる。そんな人たちが農協を支えてきた。むろん土作りにもだ。

最初に手がけられたのが、水はけ改良のための工事だった。次いで土地改良にも力を入れてきた。最初は暗渠を掘ったのだ。同時に客土もした。昭和20年代のことである。重粘土質には砂や火山灰土を客土した。火山灰客土すれば二、三年間は確実に収量ダウン。ただ作業は非常にラクになる。畑がよほど乾かないと機械が入らなかつたのが、客土で土に粘りがなくなつて入るのでスーッと入るからだ。

### ▽土に貯金しろ

土に造詣が深い農協組合長のことである。例えもユニークだ。

「農業の基本は土だからね。貯金するのであれば地力で貯金しよう。これが私が考へつたスローガンです。養豚牧場の堆肥をもらつたりして畑に還元していただきますよ。土作りには不良債権はありませんからね。やればやつただけ答えてくれるんですよ。利息もきちんとついてきますし。それもコンマ以下の金利ではありませんからね」

土は正直なのだ。きちんと土作りをすれば、それが作物の出来に正確に反映してくる。このごく当たり前のことが農家に伝わらない。久世組合長が切齒扼腕

するのは、このことだ。それで不作にもなれば他人に責任を転嫁する農家も多い。久世組合長は、そんな農家に警鐘を乱打しているかのようである。

常呂町にはサロマ湖がある。ホタテの養殖で有名だ。日本一の産地でもある。ホタテ加工の過程でウロや貝殻が廃棄物になる。その量は年間3000tになる。この廃棄物の処理に頭を痛めてきた。オホーツクに面しているだけに鮭や鱒の加工工場もある。当然内蔵が出てくる。久世組合長はこれらに目をつけた。ウロや内蔵をすり潰して畑にまいてみた。これが思わぬ効果があつた。地力維持に役立つのだ。だが強烈な臭いが出るので苦情が出た。最近では取りやめてしまった。それに代わつてというわけではないが、貝殻の有効利用に奔走した。

「地元の漁協と産業振興公社を作つてね。産業廃棄物だったホタテの貝殻を粉砕して石灰を作つている。土壌改良材と鶏の飼料として使うんだ。貝殻だからカルシウムも微量要素もいっぱい入つている。一時はカドミウムが入つているとクレームがついたウロを原料にした土壌改良材も、濃度を下げれば問題なしという結論だった」

常呂農業のもう一つの敵。それは天候である。ここ数年、天候不良が続いている。その前はそうでもなかった。日照が多いことで他地域の農家から羨ましがられてきた。農産物の出来もよい。バレイシヨであれば味がある。ビートであれば糖度が高い。こういう評判が聞かれていた。それがここ数年変わってしまったのだ。長雨の連続災害。これにずっと悩ま

されているのだ。

被害の度合いは大きかった。水はけが悪い。これが理由だった。畜産物は計画通りの生産がありながら、96年の売上高は38億円だった。平年より10億円ダウンの数字だ。一戸当たりには約500万円の減収である。それでも悪天候が続いた割には、水はけのよい畑ではまずまずの収穫だった。そう慰めてもいる。畑の水はけをよくしていた。そんな努力があつたからだ。

「これも日頃の土作りが効を奏したんだな。そう思っているよ。同じような気象災害を受けた他の農協管内の農業地帯では収量が落ちていっていると聞いているよ」

昨年は面積は小麦が一番。1600haだった。次いでビートである。1200ha。以下1000haのバレイシヨ、250haのタマネギと続く。以前はデンブ管用バレイシヨが多かつたが、自由化でトップの座を小麦に譲つてしまった。最近では農家の所得アップを目指して加工用バ



久世篤史組合長

レイシヨの栽培を奨励している。ポテトチップスなどを作るカルビー向けにだ。

久世組合長が自慢するものが一つある。日本で最初にビートのペーパー・ポット移植が常呂町で始まつたことである。日本甜菜糖のプラントが町にあり、普及に努めたその技術者の銅像が農協本所の前に立っている。ビートのペーパー・ポット栽培の発祥の地。久世組合長の自慢の種である。種とりビートの圃場もある。種とりビートでは、いまや道内の先進地でもある。

以前は常呂町はビート栽培では収量が全道トップだった。昭和61年(86年)以降ビートが糖度で取り引きされるようになってから、実質ナンバー1の地位を斜里町や清水水町に奪われた。地力の違いもある。でもそのハンデのことは言っておれない。かつてのトップの座を奪い返したい。これが久世組合長の決意である。「デンブンの自由化で加工用のバレイシヨにスイッチしなければと思つてね。デンブン工場も廃止する計画です。これを機会に、ちようど北海道庁が昨年から導入した『21世紀パワーアップ事業』をテコに常呂町農業も大転換を図るべくいろいろと考えているところです」

常呂町の農家は農協活動にも積極的だ。組合員の口から、「自分たちの農協」と言う言葉が聞かれる。それだけ農協に愛着を持つている証拠でもある。それは日頃から何事も農協を核に話し合つてきた。そんな積み重ねが道東地区でも優秀な農協の一つにリストアップされている所以でもあるようだ。これも久世組合長の人柄の為す技とみた。